拡大ＥＵ時代の欧州地域政策の比較研究（その３）
～産業遺産保全と地域文化政策～

Comparative Study of Regional Policies in Expanding EU（Ⅲ）
-Industrial Heritage Conservation and regional cultural policies -

根本　敏行
文化政策学部　文化政策学科
Toshiyuki NEMOTO
Department of Regional Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

藤田　憲一
文化政策学部　文化政策学科
Kenichi FUJITA
Department of Regional Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

種田　明
文化政策学部　文化政策学科
Akira OITA
Department of Regional Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本研究は、拡大ＥＵとして欧州が統合される時代において、産業構造の転換に伴う地域の課題解決のための取組みを取り上げ、比較分析するものである。本稿では特に、イタリアにおける産業遺産の保全・活用の新しい事例をとりあげ、地域再活性化に結びつける手法について、「産業政策」と「文化政策」の「地域政策」を媒介とする高いレベルでの融合に着目し、その背景、経緯、政策上の課題などを論じた。

This paper picks up some case studies to practice comparative analysis of regional policies aiming to solve regional problems that occurred within diversion of indstrial structure in expanding EU. It tries to reveal the backgrounds and processes of some new cases in Italy, which connect reservation or restoration of industrial heritages to regional regeneration or revitalization, that is high-level amalgamation of industrial policy and cultural policy through the medium of regional policy.

Ⅰ．はじめに

本稿では、拡大EU時代の欧州地域政策の比較研究（その１）[1]、同（その２）[2] に続いて、本研究に共通するテーマ（地域独自の資源を生かした産学官協働による地域政策の展開など）を共有する主要な地域として、北イタリア[3] を取り上げた。（その１）では2004年９月３日から９月30日の日程でイギリス、ベルギー（フランダース）、ドイツ（ルール地域）、フランス（アルザス地方）の産業遺産やエコミュージアムなどの現地調査を行い、（その２）では2005年９月１日から９月20日と2006年２月20日から２月25日の日程でアイルランド、オーストリアの現地調査を行った。今回（その３）は2006年９月13日から９月23日の日程でイタリアのローマ、テルニ両市と北イタリア各地の現地調査を行い、本稿はそのうち北イタリアの典型的な事例の調査結果をもとに論述している。

なぜイタリアか。現在イタリア各地は、特徴ある歴史的な地場産業から発展した製造業の産業遺産を貴重な地域資源として見直し、今日の観光や地場産業などの地域振興を視野に入れた活用の方策が展開されつつあるからである。

こうした傾向を背景に、2006年度にはTICCIH[4] の大きな大会も開催され、内外の研究者が集まった。2006年度（その３）のイタリア調査は、第14回国際産業遺産保存会議(TICCIH2006 Roma/Terni)の日程とコングレスツアーに調査対象を重ねている。多数の見学研修対象の中から、地域の独自性に育まれ地域の文化に根ざした“地域政策”、とくに産業遺産をまちづくりや産業観光に利活用している現地の新しい取り組みを取材する機会に恵まれ、これをもとにいくつかの典型的な事例を取り上げるものである。

イタリア国内の他の事例等については、『都市・地域研究　012号』、静岡文化芸術大学2008年刊行予定号に収録する予定である。「拡大EU時代の欧州地域政策の比較研究」は（その１）から（その３）までで一応の区切りとし、『都市・地域研究　012号』には（その１）から（その３）の現地調査と、その他の関連研究成果等をとりまとめた全体の研究報告も収録する予定である。

本稿では、Ⅰ、Ⅱの１、Ⅱの２、Ⅲの２を根本、Ⅱの３、Ⅲの１を種田、Ⅳを根本と種田、Ⅴを藤田が執筆担当した。

Ⅱ．北イタリア

１．概　況

（1）南北イタリア

南北に細長いイタリア（図Ⅱ－１）は、その歴史も文化も経済構造も、北と南で大きく異なる。

アルプスを経てフランスやスイス、オーストリアと接続する北イタリアは、国民国家としてのイタリアやスイスといった国家概念が確定する以前から、繊維・織物や金属精錬・加工、非鉄金属や岩塩などの鉱物資源開発、地域の風土に適した特色ある食料品製造・加工などの製造業が立地していた。北イタリア諸州は、中南部に比べて歴史的に早い時期にイタリア王国に併合されたこともあり、近代化が進んで相対的に平均所得が高く、イタリアの南北分離を目指した北部同盟の支持基盤ともなっている。また、独立した共和国の連合という状態を脱して、トリノの最初のイタリア国会で国家の統一が宣言された19世紀中盤ごろからは、トリノやミラノをはじめとする北イタリアの有力な都

市を核に、イギリスやドイツで先行した産業革命の流れを受けて新しい近代的な産業の発展がもたらされた。

一方の南イタリアは長らく農業を主体とする産業構造が続き、今日でも南北の産業構造の違いや所得格差は依然としてイタリアの大きな国内格差問題となっている。また、国民性も、真面目で勤勉な北に対して南は陽気で天真爛漫だとされる。本稿でとりあげる毛織物産業の拠点都市ビエッラ周辺では、人々の性格は「イタリアのスイス人」と呼ばれるくらい職人気質で几帳面であると言われている。恐らくローマ・カトリックが強い南に比べて、資本主義の揺り籠になった禁欲的なプロテスタンティズムの影響を受けた北との、宗教的、文化的な背景の違いもあるのであろう。

（2）北イタリアの産業の特徴

今日、イタリアが国際的に競争力を持つ製造業の分野としては、繊維、衣料品、靴・鞄・装飾品などのファッション関連、家具や陶磁器、オリーブ・オイル、パスタ、ワイン、ハム、チーズなど、主に「衣・食・住」に関連した領域に特徴がある。自動車についてもイタリア製のものはその独自の「デザインの良さ」すなわち「ファッショナブルであること」が高く評価されている。北イタリアには、こうしたイタリアならではの製造業の産地が、品目毎に、以前の地場産業として盛んであった地域毎に集積し、少しずつその姿や性格を変えながらも今日まで続いている例が多く見られる。

また、製造業以外では豊かな歴史や文化の蓄積を背景に、国際的な観光の分野でも非常に強い競争力を持っている。

（3）産業遺産

中世以来、ものによってはそれ以前からの長い歴史を持つ製造業は、その多くは世代交代の結果、本来の役割を終えて「遺産」として各地に残るのみであった。しかし、その中のいくつかの領域、先に触れた「衣・食・住」の中でもとりわけ典型的には繊維産業に関連する領域で、当初の製造業としての役割から、今日ではファッション関連産業としての新しい役割を担う受け皿として変貌しつつある例がある。

もう一つの新しい動向として、拡大されたEU域内で国境を接する複数の国の地域同士が、中世以来の地場産業を絆とする新しい産業遺産活用の横断的な連携を目指していることがあり、イタリアもこの動きに積極的に参加・協働しつつある。

また、イタリア国内の地域政策として、こうした特徴ある産業遺産に光を当てて、イタリアの得意分野である「観光」に融合させることで新たな地域活性化につなげて行こうという意図も見られるのである。

具体的な取り組みとしては、古くから毛織物産業が立地したビエッラを核とし、北のアルプス方面に展開する「羊毛街道（あるいはウールの道）」、同じくアルプス山麓に点在する製鉄関連の産業遺産を繋ぎ、国境を接するオーストリアやスロヴェニアとも連携した「鉄の道」の事例を取り上げた。

また、イタリアでも、イギリスなどからやや遅れて出発した産業革命下で、啓蒙的企業家による「工場都市」（あるいは「産業村」）が建設されている。これらの中で、特に保存状態が良く世界遺産にも登録されているクレスピ・ダッダと、わが国ではまだあまり知られていない事例で、今もなおその発端となった毛織物産業が現役としてその地に現存しているヴァルダーニョの事例を取り上げた。これらの事例では「産業遺産」としての「工場都市」を地域独自の資源として保存・再生することにより、新たな地域観光振興をも目指している。

2．羊毛街道（La “Strada della lana”）

（1）羊毛街道（あるいは「ウールの道」）

繊維、織物など、業界用語ではテキスタイルやアパレルなどと呼ばれる分野では、中国やインドなどの新興工業国が急速に競争力をつけて来ているが、世界中を席巻しているフォーマル、カジュアルな服装（背広など）のルーツであり拠点となるのはいまだに欧州である。製造国は中国やインドであっても、デザインはフランス、イタリア、イギリスなどが世界をリードしている。日本語の背広（せびろ）の語源となったサビル・ロウ通りのあるロンドンをはじめ、イギリスはトラディショナルなデザイン、イタリアは有名ブランドが多く、モダンでファッショナブルなデザインの拠点である。

ファッション全般ではフランスが有名ではあるが、こと毛織物についてはイギリスとイタリアを２大巨頭と呼んでよいであろう。

その一方の雄、イタリアの毛織物の歴史を担った産業遺産と伝統が集積しているのが「羊毛街道」である。

「羊毛街道」は、イタリアでも北端に位置するピエモンテ州[5] ビエッラ県[6] 内にあり、中世毛織物産業発祥の地とも言える拠点都市ビエッラ（Biella）から、同じく中世以来の羊毛市場の拠点であったボルゴセージア（Borgosesia）に至る東西およそ50kmにわたる道筋である。ストローナ（Strona）とセッセーラ（Sessera）の両河川の流域を跨いで、北はアルプスにつながる山間地域に広がる（図Ⅱ－Ⅰを参照）。

沿道には数多くの毛織物産業にかかわる産業遺産や関連施設が残されている。拠点都市ビエッラは山地の南端の平坦地にあるが、街道沿いの古い工場等は水車動力に頼っていたため、高低差のある山間地域に点在している。

拠点都市ビエッラ周辺は、中世には既に羊毛加工技術が普及していた。その後、1245年にビエッラの法律によって羊毛加工職人や紡績工の地位が位置づけられたことを契機として製造活動はビエッラ地域全域に広がり、繊維産業の伝統の礎を築いたとされる。その後、最も古い記録（1582年の国勢調査）からは、16世紀末から17世紀中葉にかけて、紡績から機織、染色などの様々な関連工程を含む手工業の職人達がこの地域に住みついていたことがわかっている。

手工業的なビエッラの地場産業が近代的な産業にまで発展する第一歩となったのは、1817年、ピエトロ・セッラ（1784-1827）がモッソ谷（Vallemosso）にあったセッラ家の毛織物工場に始めて毛織物加工のための機械を導入したことによる。これを契機としてその後の数十年間で近代的な「工場システム」と呼べるような機械化された

図Ⅱ－１：イタリアの州と州都（20 の行政区分）

Copyrighted by Graphic Maps. All rights reserved!
（出所： http://worldatlas.com/webimage/countrys/europe/special/italyreg.htm）
イタリアを行政区分でみると 20 の州(Regione)からなる。各州はいくつかの県(Provincia)に、県の中が市町村(Comune)および基礎自治体に分かれている。

設備が普及していった。

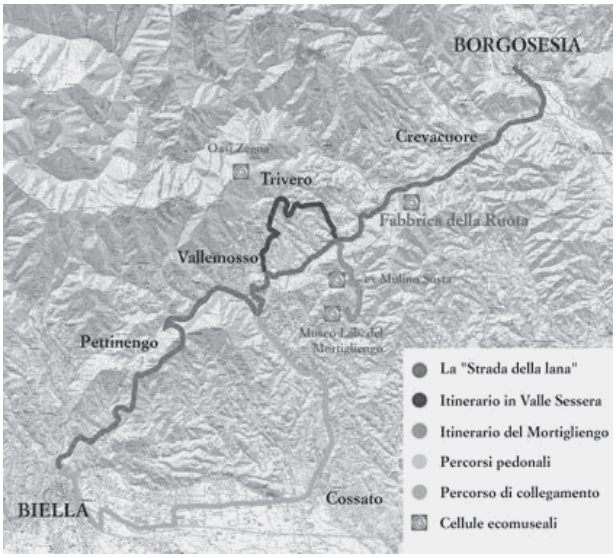
ビエッラ周辺は、今日でもイタリア繊維産業の重要な拠点のひとつであり、とりわけカシミアをはじめとする極細繊維による高級毛織物産業が有名で、世界中のデザイナーに高品質の素材を提供し続けている。

この道筋は、これまでも数世紀の間「羊毛街道」と呼ばれていたものであるが、今日では改めて沿道の産業遺産を活用した新しい観光ルートとして位置づけられている。ルート上に点在する、異なる時代の様々なタイプの歴史的建築物を保存・改修するとともに、その間にある他の歴史遺産や自然景観もあわせて修復し、産業観光とグリーンツーリズム（自然保養の観光）とを兼ね備えた観光資源集積とネットワーク化を図るものである。山間を縫うように続く羊毛街道の沿道には、産業遺産である古い工場群（その多くはまだ現役）や煙突だけではなく、「ランメ（ramme）」と呼ばれる段丘と、それらの間にある労働者・職人たちの暮らした住居群（村）、経営者の屋敷や彼らが職人の「定着」を促すために建設した幼稚園、学校、職員クラブなどの各種施設、水路、水門や発電所、19世紀に川沿いに工場と住居を繋ぐように作られた「労働者の道（sentieri del lavoro）」などによる生活基盤がネットワークとして連なっており、独自の景観を形成している。

また、これに加えて工場笛の笛音による「音のランドスケープ」といった趣の要素も加わり、ハード、ソフト両面での「羊毛景観」とでも呼べるような演出が展開されている。

背骨となる「羊毛街道」に加え、その周辺にはいくつかの分岐ルートが谷間を縫うように加えられ、訪問者を欧州有数の羊毛地帯の技術と知識の探求に誘う。現在、街道本体と分岐ルートで合わせて12箇所のステーションと、その他合計30数箇所の「みどころ」がピックアップされており、うち4箇所はエコミュージアムに位置づけられている。

「羊毛街道」のプロジェクトは、主に「ビエッラ地域の文献と文化遺産保護センター（Centro per la documentazione e la tutela della cultura Biellese）：通称DocBi（Centro Studi Biellesi）」によって進められているが、パートナーとして「トリノ工科大学（Politecnico di Torino）」と、「ビエッラ地域エコミュージアム（Ecomuseo del Biellese）」、「ピエモンテ州エコミュージアム（Piemonte Ecomusei）」が協働している。



図Ⅱ-2 「洋毛街道」
（出典:http://docbi.it./sdl/2007.08.hit）

（2）車輪の工場（la Fabbrica della Ruota）

①概要

「車輪の工場」は、羊毛街道の中ほどのプラーイ（Pray）のフレッダ谷（Vallefredda）にあり、特徴的な動力伝達機構とマンチェスター型の重層構造の建屋を特徴とする工場で、街道全体の象徴であり中心施設である（写真Ⅱ－1、2と図Ⅱ－2）。イタリア語ルオータ（ruota）、英語でホイール（wheel）は車輪、動輪であるが、ここでは車輪を意味するわけではない。建物外観の特徴である動力伝達機構の大きな「プーリー」の外見が、スポークの付いた車輪に似ていることからこう呼ばれている（写真Ⅱ－2）。

遠隔動力伝達機構は、谷川の河床に設けた効率のよい「水力タービン」で発生させた高速の回転動力を、川岸の工場建屋の大きな鉄のプーリー（これを「車輪」と呼ぶ）にワイヤーロープで伝達するもので、イタリアで現存する唯一、欧州でも非常に珍しい機構である。また、人工的な工場が周辺の自然環境とも調和した特異な景観を形成しており、羊毛街道の工場群の中でも象徴的な位置づけである。

今日では、ビエッラ地域の（羊毛を主体とする）織物工業の歴史を物語る常設展示の博物館、そして織物工業の歴史的記録を蒐集した文書館（ドキュメント・アーカイヴ）、専門図書館、合わせて様々なイベント開催も可能な設備などを兼ね備えた複合施設として整備され、羊毛街道全体の情報センターとしての役割も担っている。

②歴史

この地域は1826年からボゾーネ伯爵領で多くの地場産業が立地しており、サヴォイア王家がイタリアを統一する頃まで諸産業が栄えていた。中世以来の「羊毛街道」に

（根本撮影 2006.09. 以下同）

写真Ⅱ-1
「車輪の工場」正面入口

位置し、その後も水運や重要な鉄道ルートに接続し、近代化以前の手工業から工業の近代化への歴史がずっとこの地に根付いていた。

「車輪の工場」の歴史は 1878 年に始まる。

ピエトロ・ツィニョーネ（Pietro Zignone）とその兄弟は、ボルゴセージアに注ぐセッセーラ川（Sessera）支流のポンツォーネ川（Ponzone）沿いに新しい毛織物工場の建設を計画した。もともとツィニョーネ家は企業家の伝統を持っており、近隣で他の事業を展開しながらこの新しい事業に乗り出し、新工場に毛織物製造の工程を集中するつもりだったとされる。

ポンツォーネ流域では、既に他の同様の小規模な企業家達が水車動力の事業所をいくつも建設しており、ツィニョーネ達もこれに続こうとした。「車輪の工場」の建つ場所は、ポンツォーネとリオ・スコルド（Rio Scoldo）の2つの流れから近い距離にあり、豊富な水資源を利用するには絶好の立地条件であった。また、折りしもビエッラとヴァルセーシア（Valsesia）間をつなぐ「モッソ－プラーイ地域横断道路」が開通したばかりであり、これは迅速な陸上交通の便をもたらすものであった。

しかし、19 世紀末期は、急速に普及してきた民営の事業所（水車小屋）が既存の官営水車小屋と勢力争いを始めた時期で、地元の町フレッキア（Flecchia）は流域に次々と立地する事業所の供給過剰に懸念を持ち、「一地域に石臼2基と麻打ち施設を設置した水車小屋ひとつ」という立地規制を敷いていた。当然、ツィニョーネ兄弟の新事業も町当局との折衝に対応せざるを得なかったと考えられる。

ただ、町当局は地域全体としての新しい民間投資は歓迎したことから、粉挽きや麻打ちと競合しない毛織物工場である「ツィニョーネ毛織物工場：Lanificio Zignone」は規制に抵触せず 1878 年に当地に建設された。

特徴的な遠隔動力伝達機構はビエッラの天才技師モッリオーリ（Maglioli）によって考案されたもので、ポンツォーネ谷で最大規模のマンチェスター型の羊毛加工工場本体は、ツィニョーネ家の跡取りの後見人でもあったアンセルモ・ジレッティ（Anselmo Giletti）のイニシアチブのもとで建設された。

遠隔動力伝達機構の仕組みは、谷底の水力タービンと工場建屋とをつなぐプーリー（車輪）とワイヤーロープからなる（図Ⅱ－2）。川の水は、一度鉄パイプの中に導かれ、高い水圧を保ったままケーシング内の水力タービンへと導かれる。タービンは開放型の水車に比べて水力から回転力へのエネルギー転換効率が良く、今日の水力発電などでも使われている。当該施設はこれによって水エネルギーの約30パーセントが有効活用されたものと推定される。高速回転する回転動力は長いワイヤーロープで直径 2 メートル近い「車輪」に伝達され、トルクの強い低速回転に変換してから工場内で使われた。谷底のタービンの効率を最大限にし、工場本体は搬出入の便利な谷の上段に立地させるため、長い距離をワイヤーロープで繋ぐ独自の仕組みとなった。この機構は、工場の動力源が水力発電による電力に取って代わる 1953 年まで使われていた。

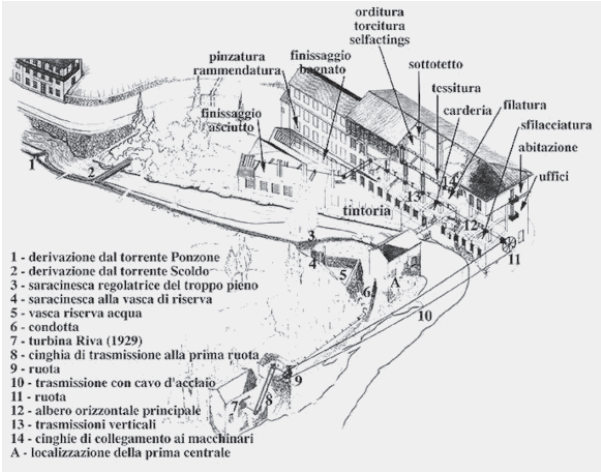
工場は、原毛加工から紡績、機織を経て生地に仕上げるまでの全工程を含む一貫生産の可能な先駆的なものであった。これは、ツィニョーネ家の企業家の一人が産業革命の中心ロンドンを訪れた際に新時代の機械類を見て感激し、イングランドからの帰路、ベルギーで紡績機械等を購入し、ベルギーの技師を伴って持ち帰ったことに始まる。

ツィニョーネ家は、既にフレッキアで関連事業を手がけており、近隣のソレシオ分集落（frazione Solesio）に「ツィニョーネ・トラバルド商会（ditta "Zignone e Trabaldo"）」という名前の染色工場を賃借していた。共同経営者のトラバルドは 1896 年まで一緒に経営に携わっていたが、その後ツィニョーネ家のカルロ（Carlo）に所有権が一本化された。

1900年、カルロが若くして亡くなったあと、妻のフェリシータ・トネッラ（Felicita Tonella）と幼い 5 人の子供たちが残された。最初の数年間はツィニョーネ家の人間ではないフェルラ（Ferla）兄弟がこれを助け、その後しかるべき年齢になった兄弟たちが管理できるようになるまでやはりツィニョーネ家に縁のあったアンセルモ・ジレッティに事業運営がまかされていた。

初代経営者の夭逝といった危機を乗り越えて同工場は繁栄し続け、地元フレッキアはもとより周辺各地からも多くの労働力を集め、遠方の工員は片道 2 時間をかけ通っていた。

写真Ⅱ-2
「車輪の工場」の車輪（プーリー）



図Ⅱ-3 「車輪の工場」
（出典:資料 2）

同工場は、地元の他の企業家たちとも連携しながら1960年代まで操業を続けていた。その間、新しい設備も追加され、最盛期の1930年代には150人の従業員が３交代で働いていた。製品の市場はイタリア国内だけではなく海外にまで広がっていた。大口の取引はいつも軍需用であったが、総量では平和時にも戦時と同じように需要があった。

毛織物工場としての役割を終えたあと、1966年、工場はカルロ･ベレッタ（Carlo Beretta）の手に渡り、1968年11月の大洪水で床がひどく損傷するまでは倉庫のような用途に使われていた。地形の急峻な山間地域の谷川はたびたび洪水を起こし、流域のおよそ70もの事業所が被害を受けた 1927 年の洪水では倉庫と染色工房の一部が破壊される被害を受けている。1968年の洪水のあと、一応の修復はされるが、本当の意味で工場が息を吹き返したのは産業遺産としての再生に着手された 1984 年といえよう。

③産業遺産の再生と活用

２年間の修復作業のあと、「セッセーラ谷とストローナ谷（Valsessera e Valle Strona）の産業遺産」として位置づけられるが、今日の複合的機能を有する博物館として整備されるのは 1992 年にカルロ・ベレッタが工場施設全部を地元に寄付したことに始まる。

その後、ピエモンテ州、ビエッラ県、建物保存協会や民間企業などの協力のもとで、「DocBi」が中心となって、段階的に全ての遺構を復元しつつある。今日見られる施設は博物館や文書館としては一応の整備がされているが、修復・復元はなお進行中である。肝心の遠隔動力伝達機構は、水源の問題から以前のような水流を確保できず、稼動復活には至っていない。

施設は、全体としてビエッラの織物工業の記憶を具現化するもので、博物館機能を中心に様々な機能が複合されている。展示内容などについてはトリノ工科大学（ポリテクニーク）が協力している。

入口受付から最初に位置するのは「時のホール」と名づけられた展示室である（写真Ⅱ－３）。工場として稼動していた当時の内装に完全に復元された室内に、各種の機械類と映像によるビジュアルな展示が施されている。壁の油のしみもそのままに残されている。

入室すると最初は真っ暗で、やがて室内の薄いベールに地域の羊毛産業や「車輪の工場」の歴史を紹介するビデオが投影される。これが博物館訪問の全体の導入部分の演出となる。その後、室内照明が点灯され、常設の展示物を見て廻ることができるようになる。

常設展示室以外に、企画展示等の行える展示室、文書館（ドキュメント・アーカイヴ）（写真Ⅱ－４）、専門図書館、会議室（カンファランス・ホール）などが建物内に整備されている。文書館や専門図書館は、毛織物だけではなく広く地域の繊維産業全般の資料センターとしての役割を担っている。

企画展示室では、今回の調査時には「ファブリック―未来への一つの視点―（fabbriche － uno sguardo al futuro －）」と題する、羊毛産業を題材とする芸術写真展が開催されていた。タイトルのファブリックは、「工場」と「織物」の２つの意味が含まれるものである。

文書館には大変貴重な文献類が1,500巻以上のファイルとして分類・整理されており、専門図書館には18分野の膨大な量の文献が蒐集されている。訪問者側から見学したり調べたりするばかりではなく、専門知識を持ったスタッフによる学習プログラム等も提供されている。訪問者は、手動の機織や糸紡ぎの体験学習コースを通じてアート作品としての織物づくりの体験（実演）を経験することができる。

いま一つ、この施設で特徴的なのは、地元の伝統的な食材を用いた郷土食を提供していることである。ピエモンテ州、とりわけビエッラ県は、地域ごとの特色ある食材に恵まれ、豊かな食文化[7]を持っており、今や世界的な流行である「スローフード運動」の発祥の地でもある。郷土食の試食会は、イベント開催時や通常は事前の予約が必要であるが、「ビエッラの味覚（Sapori Biellesi、Tastes Biellesi）」といった地元の主婦を中心とするボランティア活動団体と博物館との協働で開催される。

季節にもよるが、典型的な料理としてポレンタ（Polenta cunscia：挽き割りトウモロコシの粥）やマッカーニョ（Maccagno）などの珍しいチーズ、生ハムな

写真Ⅱ-3
「時のホール」と展示物

写真Ⅱ-4
ドキュメント・アーカイブ

どがある。山間地域であまり農業に適さないため、トウモロコシを主食として羊や山羊の肉やチーズ、栗などの木の実が中心となる。

この試食会は、単に珍しいものを味わうという経験を提供することにとどまらず、羊毛街道での観光振興、地元食材の市場開拓による地場産業振興、といった地域振興策の意義も兼ねているものである。

（3）アルフレード・プリーア毛織物工場

①概要

アルフレード・プリーア毛織物工場（Lanificio Alfredo Pria Mill）は、ビエッラのはずれ、北の山地からのチェルヴォ川（Cervo）の急流がビエッラの扇状地に注ぐ谷口にあり、ビエッラとボルゴセージアを繋ぐ「羊毛街道」のちょうど入り口にあたる。急峻な山地から流れ出る奔流が最後に平地に出る直前の固い岩盤に穿った谷には、硬い岩の中州が残り、荒々しい自然景観を見せる（写真Ⅱ－5）。工場の建つ場所は、中世からそこに掛けられていた橋にちなんだ「マッダレーナ（Maddalena：マグダラのマリア）の橋」として知られる。中世には粗末な木造橋であったこの橋は、ビエッラと東の平原、さらにその先にあるフランスとを結ぶ当時は唯一の橋であった。

工場は、「羊毛街道」に展開する水車動力による近代的な工場群の中でも最も初期のもので、一連の工場立地の事実上の最初のものである。

今日では工場としての機能は失われているが、修復・保全された建物内には恐らく世界で随一と言ってもよい規模の織物見本の保管施設（アーカイヴ）を有する。合わせて、建物内にアート・ギャラリーや劇場を併設しており、複合文化施設に衣替えされている。

②歴史

「羊毛街道」に沿って立地する工場群は、流水を利用した水車から必要な動力を得ていたので、川の両岸や中洲に建てられている。プリーアの毛織物工場も同様であり、さらに加えて同工場の立地場所は特別な歴史を持っていた。

同工場は、ビエッラでも最も初期の集落の中に建てられたもので、その集落は、「チェルヴォ橋の聖マグダラのマリア修道院（il convento di Santa Maria Maddalena del ponte Cervo：以下「マグダレン修道院」とする）」とともにあった。この修道院は、独立した修道女の出家集団である「橋の淑女（signore del Ponte）修道会」によって1150年に建てられ、当初から質素な礼拝堂のようなものであった。橋の淑女修道会は、後に「シトー（Citeaux）会」[8] に合流した。

写真Ⅱ-5
アルフレード・プリーア毛織物工場とチェルヴォ川

同修道院が建てられて10年後、司教ウグッチオーネ（Uguccione）はピアッツォ（Piazzo）に「ビエッラのアクロポリス」と呼ばれた政治中心を建設、都市の立法権を有する市民階級の居住する自由都市（コムーネ：commune）としてビエッラを設立した。ビエッラは毛織物業などで賑わいを見せ、今日のビエッラの基礎となる都市開発が進んだ。

「橋の淑女修道会」は1265年にマグダレン修道院を離れ、その後1571年にピアッツォの修道院に移り、フランス革命後まで町に住み続けた。

1797年、町の修道院は飢えた暴徒による略奪にあい、修道院解散の5年後にはチェルヴォ川畔のマグダレン修道院も閉鎖された。

修道院解散のおよそ20年後の1824年、ヴィエンヌ（Viennne）から来たフランス人のルイ・ブース（Louis Bouss）は、その場所に水車動力の毛織物工場の建設を願い出た。これが「羊毛街道」に展開する毛織物工場群の嚆矢となる。

ブースは偶然ビエッラにやってきたわけではない。ヴィエンヌは、フランスの織物産業の中心であるリヨン（Lyons）地域にあるが、当時は、織物産業の分野でビエッラとリヨンの間には強い交流関係があったのである。

羊毛処理技術の専門家であったブースは、花崗岩の河床を洗うチェルヴォ川の奔流が、機械動力としての水車を回すに足るだけの動力源となり得ることに目をつけた。ブースは、イギリスに始まる産業革命が欧州全域に波及し、やがて力織機の時代になって織物工業の根本的な改変が起こることを予見していたのである。

1864年、工場はチェルヴォ川の左岸側に拡張された。そして新しい水路、大規模な運河、高さ6mの丸天井のトンネルが作られ、マグダレン橋の上流には両岸の工場をつなぐための石の橋が作られた。

19世紀末、アルフレード・プリーア（Alfredo Pria）はルイ・ブースの息子のフェデリーコ・ブース（Federico）の共同経営者となり、程なく工場全体を手に入れ、結局単独の所有者となった。彼はさらに工場建屋を改築し、今日まで残るマンチェスター型の5～6層の大規模な工場にまで拡張した。アルフレードが息子のアントニオ（Antonio）に事業を引き継いだ1934年には1000人以上の従業員が働くまでに事業が拡大していた。この古い歴史を持つ大規模な工場は、欧州でも最も興味深い産業遺産の一つである。多くの工場が第二次大戦時にはファシスト政権に接収される中、この工場は接収を逃れて操業を続けた。

アントニオ・プリーアは1974年に死去。今日、工場の所有者は彼の甥(アントニオの妹の息子)のギド・アザリオ（Guido Azario）である。今も工場の所有者一家は工場内の一角の邸宅に住んでいる。

当主の妹ヴィルギリア（Virgilia）はストランビーノ毛織物工場（Lanifici di Strambino）の所有者であるリッカルド・アザリオ（Riccardo Azario）と結婚、長女はファッション・デザイナーのアルマーニ一族に嫁いでおり、今日でも一族は関連業界に姻戚関係を張り巡らせている様子がうかがえる。

③産業遺産の再生と活用

アルフレード・プリーア毛織物工場は、修復されて「織物見本の保管施設（Archivio Pria：プリーア・アーカイヴ）」、アート・ギャラリー、劇場などに再利活用されている。修復は調査時点ではまだ進行中で、修復されたばかりの綺麗な空フロアーも見られた（写真Ⅱ－7）。

プリーア・アーカイヴは、自称「世界随一のコレクション」とされる規模を誇り、織物分野の産業考古学の宝庫のひとつである。イタリアには同様のアーカイヴが複数あり、特にもうひとつの毛織物産地プラート（Prato）にあるラネロッシ（Lanerossi）のアーカイヴも有名であるが、プリーア・アーカイヴには他には無くここにしかない生地サンプルがたくさんある、というのが世界随一を名乗る根拠である。

ここにはビエッラ地域産を主体とする18世紀から今日までの何十万パタンもの織物見本が千冊以上の見本帳に製造年ごとに整理・編纂されており、全ての織物見本と一緒に、各々その再現を可能とするような技術情報が記載されている。高級ファッション布地の開発は、新しい創作だけではなく、過去の発明の中にも様々な手がかりを見出すことができる。これは、芸術のあらゆる形態で起こることで、特に布地が人体を飾るような表象芸術においてよく見られるものである。

当該施設は、毛織物工場としての機能は既に失われているが、このコレクションによって、今でも織物製造にとって重要な情報、「創造性へのヒント」とも呼べる情報を提供しているのである。

アーカイヴは、現在の当主ギド・アザリオの私有施設であり、誰でも自由に出入りできるわけではないが、イタリアやフランスの一流の服飾デザイナー達（ジョルジオ・アルマーニなどの有名人を含む）がこのアーカイヴを利用しているというのが当主の自慢である。

工場内には、同じく私設ではあるが、アート・ギャラリーや劇場が作られており、工場所有者（当主）のいわばメセナ活動の一環として展開されている。貸会館として場所を提供して世界中から展覧会や展示会などを誘致するに留まらず、様々なイベントも主催している。

工場はチェルヴォ川を挟んで両岸に展開しており、両者は石の橋でつながれていたが、この石橋は2000年の洪水で流出し、橋の復元はされていない。当主は、芸術活動支援の一環として、流された橋にかわる新しい「橋」のデザイン・コンペを女性建築家限定で実施した。写真にある「ペンギンの行列」のようなインスタレーションが当選作品である（写真Ⅱ－5、6）。館内のアート・ギャラリーには、コンペのその他応募作品の模型が展示してあった。

(4) 考　察

「羊毛街道」とその中の典型的な工場施設の再利用の事例をいくつか紹介したが、諸事例からもイタリアにおける産業遺産の保全・活用と、イタリアの得意分野である繊維産業、ファッション産業、観光業との連携の様子が見て取れる。

「羊毛街道」では、18世紀から19世紀の毛織物工業の隆盛を支えた水力による工場群を修復・保存するとともに、エコミュージアムの理念を導入し、周辺の自然環境やランドスケープと合わせて広域的にネットワークされた観光資源として位置づけている。

「羊毛街道」という基本的な発想は、「毛織物のメッカ」であり「観光大国」であるイタリアの競争力をさらに補強するものとなっている。「博物館は、（中略）“その土地と文化的ランドスケープの観光”を魅力的にするための競争的資源となると考えられて」おり、「イタリアでは“その土地と文化的ランドスケープの観光”、いわゆる“知識観光”は、他のあらゆる種類の観光よりも５～７％高い成長率を示している」[9]。

「車輪の工場」は、特徴的な産業遺産としての修復・保全に加え、この地の毛織物産業や地域独自の生活文化の特徴を伝える情報拠点であり、さらに今日の新しい文化活動の活動拠点にもなっている。プリーアの工場跡にもアート・ギャラリーや劇場が併設され、各種の文化活動が展開

写真Ⅱ-6
「橋」のアート・インスタレーション

写真Ⅱ-7
修復された工場の一室

されているほか、工場主自らがデザイン・コンペを実施するなどの文化振興事業も手がけている。両施設とも、公設、私設の違いはあっても、時代を超えた地域文化の情報発信拠点としての役割が、歴史のある産業遺産という入れ物の中に巧みに展開されており、両者の相乗効果が発揮されているものと見ることができる。

また、「車輪の工場」には資料館と専門図書館が併設され、プリーア・アーカイヴには私設ながら非常に優れた織物見本保管施設があり、今日の最も先端的で創造的なデザイナーやエンジニアに貴重なヒントを提供している。これもまた歴史ある産業遺産を生かして今日の新しい文化の振興を支える重要なインフラストラクチャーを提供しているものである。

3．拡大 EU の「鉄の道」

われわれの調査時(2006年９月)は、“拡大EU鉄の道”プロジェクトがスタートしたばかりの時点であった。同プロジェクトは2006年6月に第１回国際会議（Clusone、イタリア）、12月に第２回国際会議（Bohinj、イタリア；図Ⅱ－4の⑦）、2007年10月に第3回（the Iron Route final results）がオーストリア（Hüttenberg；図3の⑥）で開催され最終報告がなされる途上に、われわれは本情報を得たのである。[10)]

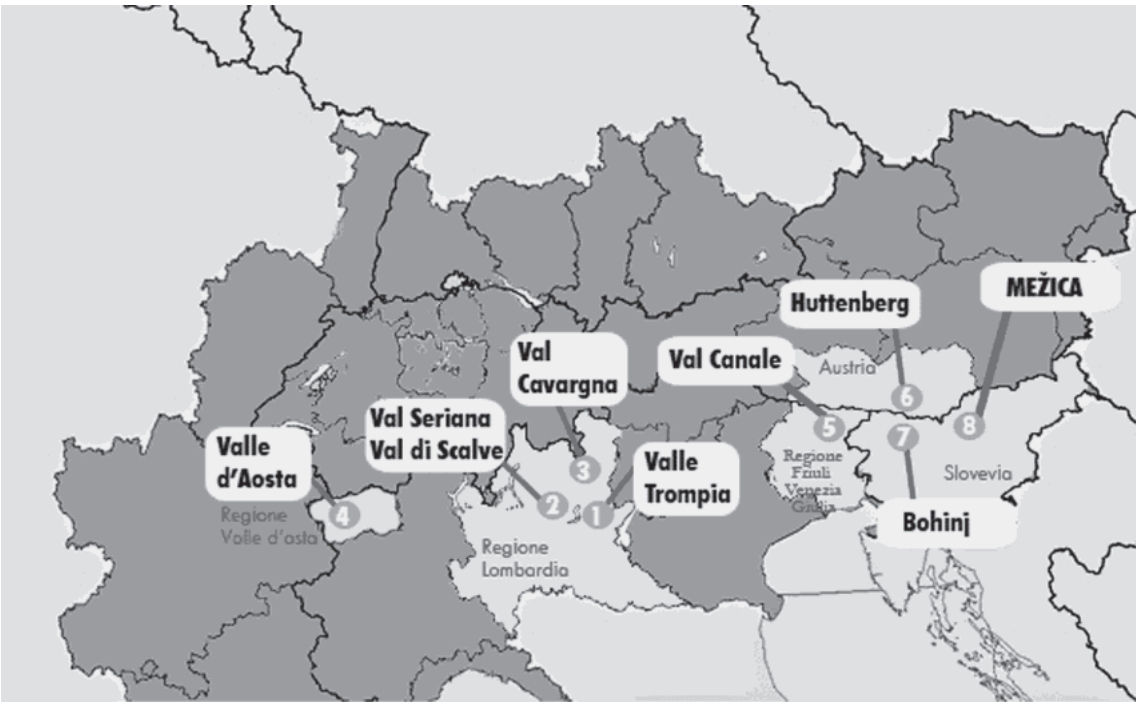
情報源の「3 カ国共同制作パンフレット“IRON ROUTE”（英語版）」の番号にそって、地域の特徴を示して行こう：（図Ⅱ－４の番号は【○数字】で示す）

（1）【①】Italy, Regione Lombardia, [Valle Trompia トロンピア峡谷]は、古代から地域に生きる人びとの仕事・伝統・信仰に密接につながる歴史文化環境的遺産を提供する。この地域には 3 つのコース設定ができる。すなわち「鉄と鉱山ルート」「保護された自然と奉納チャペル(The Sanctuaries and the Votive Chapels)」「森林の道(The Wood Road)」である。前二者は、地域とその中心都市ブレッシャ(Brescia)を結ぶコースであり、産業考古学・考古学・アートに興味深い調査・見学対象を提示している。

（2）【⑤】Italy, Regione Friuli Venezia Giulia,[Val Canale カナーレ谷]は、ジュリアン・アルプス(Julian Alps/Alpi Giuli)の麓にある。Canin 山や Fusine の諸湖はすばらしい眺望を提供している。ケーヴ・デル・プレディル（Cave del Predil）の“鉱山の伝統展”、６つの自治体に跨る“ジュリアン・アルプス麓”公園のほか、1976 年地震後に技法を尽くして再建されたジェノマ（Genoma）とヴェンツォーネ（Venzone）の古代建造物など見る価値のあるものは数多い。

（3）【④】Italy, Regione Valle d'Aosta,[Valle d'Aosta ダオスタ盆地]は、ヨーロッパ最高峰―ビアンコ、ローザ、セルヴィーノ、グラン・パラディソ―に囲まれて中庭のようになったイタリア最小の地域である。人口12万人、面積3262km^2、北はスイス、南と東はピエモンテ地方、西はフランスと境界を接している。アオスタ(地域の中心地)が育んできた重要な芸術的・歴史的遺産には、B.C.25 年にローマ人によって建造された都市、新石器・青銅器時代の定住地遺跡などがあり、ローマ時代や中世の聖なる芸術の、そしてロマンス語芸術の傑作も影が薄い。加えてこの地域は、仏・伊・独の言語・文化・歴史・伝統の十字路でもあり、最高峰に囲まれている自然と農耕牧畜の景観が手付かずのまま豊かに残されている。動植物や歴史・考古・

図Ⅱ－４：“IRON　ROUTE”拡大 EU 鉄の道プロジェクト；南欧３カ国／７地域



（出所：http://www.ironroute.org/site-it/index.asp ; Sept.2007）
〔パンフレット(注(8))と上図の“番号”にはズレがあるが、３カ国／７地域は同じ。ただし、上図の#に対応するルート ・ポイントはパンフレットには無い。〕

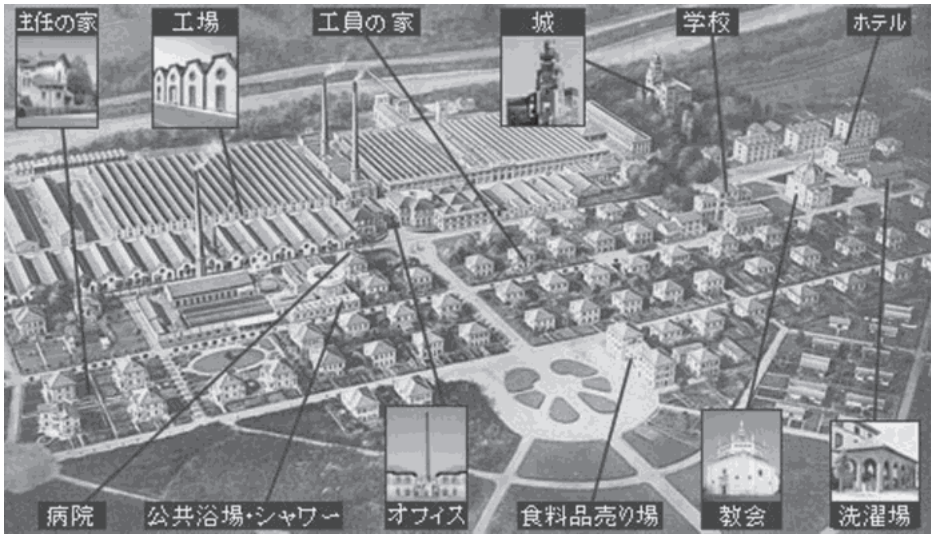
鉱山遺産に富み、伝統と地域文化に溢れた地域なのである。

（4）【②】Italy, Regione Lombardia, [Val Seriana e Val di Scalve セリアナ谷とディスカルヴェ谷]は、ロンバルディア・アルプスの麓丘に位置する、冬季スポーツとくにスキーのステーション(基地)を提供している。周辺の小都市／町もそれぞれに特色がある：クルソーネ(Clusone、時計塔・フレスコ画・新マリノーニ美術館)、アルデシオ(Ardesio、その中世的郊外(medieval suburb)・三美神の祭壇(the Graces Sanctuary))、ロヴェッタ(Rovetta、ファントーニ博物館)、グロモ(Gromo、その中世に要塞化した郊外・武器庫)などである。谷をさらに下るとセーネ(Cene)の化石公園、ガンディーノ(Gandino)の祭壇やアルザーノ・ロンバルド(Alzano Lombardo)のファントーニの作品を備えたバジリカなどが重要な観光資源である。1980年代に閉鎖した鉱山は亜鉛・鉛・銀に富んでいたが、頭書のセリアナ谷とディスカルヴェ谷はそれらに加え鉄が豊富であった。ボンディオーネ(Bondione)とガヴァッツォ(Gavazzo)の溶鉱炉は今なおその証拠を呈示している。

（5）【⑦】Slovenia, Gorenjska[ゴレニスカ], [Bohinj（ボヒン）]は、スロヴェニアの北西部、アルプス世界で言えばジュリアン・アルプスの東南、現地語で the Karavanke and the Kamniske-Savinjške Alps に位置する地方である。数多くのスキー場やジャンプで有名なプラニカ(Planica)、夏の素晴らしい眺望（城砦や湖）で鳴らすブレッド(Bled)、そしてトゥリグラフ(Triglav)国立公園を含んでいる。Bohinj 地域の大半が国立公園内にあり、そして見事な真珠のような Bohinj 湖がある。この地域には石器時代から人間が居住していたが、鉄器時代には鉄の鉱床や鉄鉱石が豊かなためさらに多くの人が来住したのである。その豊富な文化遺産は多くの博物館に所蔵され、展示公開されている。

（6）【⑧】Slovenia, Koroška,[Mežica メツィシュカ]、Koroška 地域はスロヴェニア中で最も小さな地域の一つで、三川(Meže、Drava、Mislinja)の湾曲に沿う３つの色彩豊かな谷間に広がり、スロヴェニア・アルプス(the

図Ⅲ－１：19/20 世紀イタリアの産業村クレスピ



（図の出所： http://www.villaggiocrespi.it/JPA.htm ： 2007年６月）

写真Ⅲ -1
労働者のためのテラス・ハウス、クレスピ・ダッダ

（種田撮影 2006.09.21 以下同）

写真Ⅲ -2
オフィス建物の正面

Pohorje, the Karavanke, the Savinjske)に押し込められている。現在も、山中には鉛・亜鉛鉱山で数世紀にわたり働いてきた鉱夫たちの家族が生活している。ここの特徴は、鉱山遺産の(見学)坑道内に鉱山(ミニ)鉄道あるいはバイクで乗り入れることができることにある。丘・集落・町には数えきれない数の教会堂があり、最も美しい堂宇は15世紀に建てられたゴシック様式を遺している。

（7）【⑥】Austria, Carinthia,[Hüttenberg ヒュッテンベルク]には、ローマ時代以前およびローマ時代の鉄生産遺跡がある。近傍のクナッペンベルク(Knappenberg)には、見学坑道と鉱山博物館があるほかハインリッヒ・ハーラー博物館(Heinrich Harrer Museum)・人形博物館が知られている。オーストリア科学基金によるゼムラッハ(Semlach/Eisner)の発掘調査は素晴らしい成果を上げ、ここが紀元前１世紀中頃から４世紀中頃のものだと判明した。５基の溶融炉がきれいに残っていて発掘調査された後、そのうちの１基が移築されてクナッペンベルク鉱山の見学坑道の前に据えられた。鉱山博物館には鉱夫の道具―ランプや鉱脈を調べる機器など―のほか産業(鉱業)文化に関するものが展示され、展示の更新(modernisation)が進行中である。

写真Ⅲ-3
「学校」2Fから見たクレスピ邸；クレスピ・ダッダ

写真Ⅲ-4
クレスピ村とクレスピ家の墓地；クレスピ・ダッダ

Ⅲ．工場都市「クレスピ・ダッダ」と「ヴァルダーニョ」

1．クレスピ・ダッダ

（1）概要

クレスピ・ダッダ（Crespi d'Adda：アッダ河畔のクレスピ）は、1995年に世界遺産に登録された、ロンバルディア州ベルガモ県(地方)の小さな「産業村(集落)」である。所在地はミラノから東へ約30kmで、アッダ川に沿い、クレスピ家(創設者一族)の名前を村に付けCrespi d'Adda と称する。ユネスコ世界遺産リスト(criteria (iv)(v)；ref:730)の記載は以下である：

クレスピ・ダッダは19世紀および20世紀初期に、ヨーロッパならびに北アメリカにおいて啓蒙的企(起)業家が労働者たちの必要を満たすべく建設した“企業町(company towns)”の顕著な例である。遺産は現在なおほとんど損なわれてはおらず(intact)、部分的には生産目的で使用されてもいるが、今日の経済的・社会的状況の変化のために、その存続が脅かされている。

(http://whc.unesco.org/en/list/730 2007.06.29)

他方同所は、イタリア政府観光局(ENIT)公式サイトには次のように記載されている：

「クレスピ・ダッダ」は産業革命期20世紀初頭に啓蒙的企業家クレスピが、自分の工場労働者とその家族のためにアッダ川のほとりの所有地内に造った「企業村」。紡績工場と道をへだてて労働者用の家、学校、病院、教会等を建て、当時の労働者にとっては理想郷ともいえる画期的な環境を整えた。今も工場跡や建物がそのまま村に残っている。

(http://www.enit.jp/：2007年８月)

この二つを比べると、ユネスコ／イコモスとイタリア政府(観光局／文化財省)の産業文化遺産に向けた視点の違いに気がつかれよう。ユネスコは「クレスピ・ダッダの存続」を危惧し、イタリア政府は観光資源「そのまま残っている企業村」が誇らしげである。

（2）歴史

見学調査と各種資料〔資料３）のp.135～157、資料８）～資料11)〕によって、村の歴史を略記しよう。

18世紀から綿織物・紡績業者であったクレスピ家の、

写真Ⅲ-5
整然とした工場建屋；クレスピ・ダッダ

19世紀中葉の当主クリストフォロ・ベニーニョ・クレスピ(Cristoforo Benigno-Crespi)は1875年、工場建設のためにアッダ川沿いの土地85ヘクタールを購入した。“企業町”建設と工場操業は1878年から開始されたが、クリストフォロの息子シルヴィオ(Silvio、1868 - 1944)がマンチェスターから帰国(1889年)後、“企業町”建設当初計画は大幅に変更―(労働者用の)大規模集合住宅から庭付きテラス・ハウスへ―され、さらに住宅群に加え共同体に電気を供給する水力発電所(1906／09稼動)、洗濯場、公衆浴場、無料診療所、生活協同組合販売所、学校、小劇場、スポーツ・センター、ホテル(4階建て、1878 - 80)、労働者クラブ、教会、司祭館そして中世の城郭を模したクレスピ家の邸宅(Ernest Pirovano設計、1894 - 97)と墓地が建築されたのである。

シルヴィオの経営マネジメント能力もたいへん優れており、1900年代に工場は3,000基の紡績機、300台の織機と染色部門を備え、クレスピ社は国内および国際的に評価の高い製品を生産する企業となっていた。

現在残っている形態の“企業町”(最盛期1928～30年には労働者約3200人が居住)は、1920年までに完成したが、1929年の世界恐慌とその後の国内・国際情勢―ファシスト政権の重税政策と国際経済不況―のため、クレスピ家は全物件を売却せざるをえなくなった。1931年からのイタリア商業銀行のてこ入れにもかかわらず、1936年には工場で1600人が働いているだけとなった。クレスピ家は第2次大戦後の1973年に破産したが、1970年までに大半の住宅が私人に売却分譲され、工場はレグレルテクス・ポリ(Leglertex-Poli)工業グループが所有権を有し、今日では約600人の従業員がジーンズ生産を継続している。

(3) 現況と課題

クレスピ・ダッダ(村)の概要は図Ⅲ－1のようになっている。鳥海基樹によると[11]：

街路形状はカプリアーテ・サン・ジェルヴァジオに通じる広幅員街路を背骨とし、その西側にアッダ河と挟まれる形で工場やクレスピ邸が建設され、東側は格子状の街路網に沿う形で労働者のためのテラス・ハウス群が配置された。また、同じく東側の北端部には広場が設けられ、それに面する形で教会、劇場、そして学校が建設され、広幅員街路の南端には墓地が布置された。〔図中、「城」＝クレスピ邸、墓地は図にはない〕

さらに鳥海によると、クレスピ・ダッダは1939年の自然美の保護に関する第1497号法律によって「歴史的性格と環境に関する価値を有する中心市街地」に指定され、1985年の第431号法律(通称ガラッソ法)により“バッファーゾーン(緩衝地帯)”にあたる“アッダ河両岸と中心市街地周囲の森”が保護の対象になった。

維持管理の責任はカプリアーテ・サン・ジェルヴァジオ基礎自治体にあり、都市計画には私人・公人を問わず建築への介入に際して1942年第1150号法律が適用され、公的な許可が必要とされる。同様に、北部アッダ河州立公園コンソーシアム、ベルガモ地方(県)共同体コンソーシアムと1993年適用開始となった「地域間協調プラン」によってクレスピ・ダッダ保全の“バッファーゾーン”形成が促進されたという。

問題は、鳥海によると、保存のためのプログラムがまったく準備されていない点(世界遺産なのに!)である。保存制度の不安定、過疎化の進行への積極的施策の不在、世界遺産であるのに見学者の受け入れ体制の未確立を今後どうして行くのか、注視すべきところである。

2．ヴァルダーニョ

(1) 概要

ヴァルダーニョ（Valdagno）は、イタリア北東部、ヴェネト州、ヴィチェンツァ地方（Provincia di Vicenza）のアーニョ川（Agno）沿いに建設された毛織物工場を中核とする人工的な工場都市である。

同市は、毛織物事業の企業家マルゾット（Marzotto）家によって、1836年からおよそ2世紀にまたがって建設し続けられたもので、工業化と理想的な市民社会の実現との両立を狙った当時の啓蒙的企業家の試みの一つである。

この時期、空想的社会主義者、あるいはフーリエ主義者などと呼ばれるこうした啓蒙的企業家による理想都市（あるいは企業村）の建設は、産業革命の始まったイギリスを始め、欧州各地で展開されており、イタリアでは世界遺産に登録されたクレスピ・ダッダが有名である。

イタリア各地に造られた工場都市（あるいは企業村）の中でも、ヴァルダーニョは他とは異なるいくつかの特徴を持っている。

第一に、多くの工場都市では、20世紀中にはその本来の機能を失って外観のみが産業遺産として残っている例が多い中、21世紀の今日に至るまでその毛織物工場としての本来的な機能を残しながら現役の都市として活動し続けていることである。

19世紀には啓蒙的企業家が家父長的な「志」のもとで主に自社の従業員だけを視野に入れた工場都市を建設したわけであるが、ほとんどの事例では、その後のより合理的な同業他社との競争に敗れたり、20世紀の社会主義、共産主義のもとでの近代的な労働運動や労働者福祉の制度への接続を欠いていたため、20世紀後半にまで連続する例は稀である。

一方ヴァルダーニョは、時代の変化に伴って少しずつその内容を変容させながらも、両大戦期を乗り越えて今日までその基本構造を残しながら連続している。社会主義、共産主義が世界に広がり始めた両大戦の戦間期には、一企業家の「志」に頼るような古いタイプの従業員福祉の考え方を脱し、近代的な勤労者の都市としての福祉政策に変化していった。このことを象徴的に示すのがヴァルダーニョを指す「社会都市（Città Sociale）」あるいは「調和の都市（the town of harmony：英語）」という呼称である。

第二に、ヴェネツィア共和国時代以来の古い集落から発展した旧市街と、マルゾットによって建設された新市街、さらに合わせて開発された周辺の農場などが一体となって広域「都市計画」と呼べるような全体計画のもとで統合されていることがある。工場都市が単独で産業遺産として残るのではなく、歴史のある長い都市形成の過程の中に上手に織り込まれていることは、都市計画の観点から見ても非常に興味深い。

最後に、計画的に造られた都市施設等を貴重な産業遺産

として修復・保全しながら、新しい今日の都市の発展のための資源として再利活用するという姿勢は、他の工場都市と同様の政策理念である。

（2）歴史と概要

この地の最も古い集落はヴェネツィア共和国時代に遡り、アーニョ川右岸に展開していた。その右岸の旧市街の中に、1836年、企業家ルイジ・マルゾット（Luigi Marzotto）は最初の毛織物工場を建てた。

農地が広がっていた左岸は、1920年代には一部飛行場として使われていたが、1930年代、ガエターノ・マルゾット（Gaetano Marzotto：1894～1972）が彼の毛織物工場で働く労働者のための居住地区を計画的に建設するという、当時としては先駆的な試みを実践する場所となった。ガエターノは、建築界においては気鋭の建築家フランチェスコ・ボンファンティ（Francesco Bonfanti）を招聘し、各種福祉施設などを完備した理想的な都市の計画を任せた。

当時の常識では、労働者は徹底的に搾取されて当たり前という状況の中で、他の啓蒙的企業家達と同様に、ガエターノもまた「労働者にとってより良い生活環境の提供は、結果としてより良い生産性に結びつく」という革新的で非凡な、先進的な理想を具現化しようと試みたのである。

都市デザインの面では、近代的な技術や材料を駆使しながら、古典的な建築技法、手法を重視し、特に第２次世界大戦後に世界を席巻した無個性、無国籍、均質で無味乾燥な「近代建築」とは一線を画した、統一の中にも個性の見られる質の高い景観を創り出している（写真Ⅲ－6、7）。

新たに造られた施設は、まず工場本体のための運河や水力発電施設、浄水場などの産業基盤と広大な工場本体である。1929年にはアーニョ川の水車動力に替わる水力発電プラントが建築され、これは今でも現役で使われている。巨大な工場本体は４層で、縦100ｍ以上、幅30ｍの建屋内には、イギリスやドイツから調達した機械類が据え付けられていた。

1000棟以上の工場労働者（工員、事務員）、管理職らの住宅に加え、都市としての福祉サービスを提供する各種施設として病院、産科病院、保育所、幼稚園、孤児院、療養所（養老院）、学校（小学校、工業科ほか）、余暇施設（労働者倶楽部）、運動施設（競技場（写真Ⅲ－7）、水泳プール、体育館、馬場（乗馬道））、文化施設（音楽学校、劇場）に加えて、周辺の農地にも都市住民の生活を支えるための農業や家畜施設（温室や家畜舎）が整備された。建設は第２次世界大戦後まで続き、劇場などいくつかの建物は1960年代に建てられている（図Ⅲ－2）。

中でも、いくつかの施設は大変先進的かつ意欲的な設備内容を誇っていた。例えば、いくつもある病院の中の拠点病院には、エックス線研究所、理学療法、水電気風呂、電気療法、温暖空気缶と同炉・釜、マルコーニ療法（Marconitherapeutics）、腸内洗浄、湿式吸入、乾式吸入、煙霧質療法、赤外線照射、紫外線照射、歯科、皮膚科、眼科、耳鼻咽喉科、整形外科、小児科、化学分析研究室、静脈注射、救急外来患者など思いつく限りといってよいほどの診療科があり、まさに「総合病院」の様相を呈している。

労働者のための「C.R.A.L. 労働者社交倶楽部」には、バーとレストラン、1,000人まで収容可能なホール、旅行の手配を行う「ツーリスト・オフィス」が含まれる。また、倶楽部には22席のバス２台があり、内部は座席をはずして、ベッド、調理台、冷蔵庫、トイレ、シャワー、ラジオに換装できるようになっていた。

小学校（Scuole Elementari）、職業学校（Scuole di Avviamento al Lavoro）、技術学校（Scuola Tecnica）、繊維工業高校（Instituto Tecnico Industriale Tessile）、ガルビン中等学校（Scuola Media “Garbin”）、進学中等学校（グラマースクール）（Ginnasio Liceo Classico）[12]などの各種の学校も作られ、音楽学校にはおよそ80名のコーラス楽団、「リズモ交響楽団（Rhythmo-symphony orchestra）」、アコーディオン教室、ソルフェージュ教室、90人の合唱団があった。さらに、従業員の師弟が大学、工科大学、農業高等学校、工業高校、商業高校、などに進学するための奨学金制度である「マルゾット基金（Fondazione Marzotto per borse di studio）」制度が創設された。

サッカー競技場（写真Ⅲ－7）は敷地面積20,500平

写真Ⅲ-6
ヴァルダーニュの建物

写真Ⅲ-7
ヴァルダーニュのスタジアム

図Ⅲ-2　ヴァルターニョの新市街地

方メートル、屋根つきの中央観覧席と近代的なレストランとバーが完備していた。また、鳩射撃、雀射撃、クレー射撃競技もここで開催された。なお、両大戦間の資料では「ムッソリーニ競技場」と記されており、ファシズム政権下での影響も見られる。

街の中心にある劇場、当初は「帝国劇場（Impero）」、後に「リヴォリ劇場」と呼ばれたこの建物は1850席の一般向けの映画、オペラ、演劇、ショーのほか、絵画の「マルゾット賞」の大イベントが催された。劇場の地下にはアイスホッケーの国際公式試合が開催できる規模の設備の整ったスケートリンクがあった。

マルゾット社はまた、休日のリゾート（保養）施設を従業員とその家族に提供していた。一つは山岳地帯の「ドロミテ山岳滞在村」（Pian delle Fugazze）、標高1200mにあり115ベッドの収容定員。もう一つの「マルゾット海の町」（Jesolo）は、14棟で1500ベッドの収容定員の宿泊施設、大きなレストラン、診療所、教会、農場、子供用と大人用の合計３つのプールよりなる。あと一つは「モンテ・アルビエリ（Monte Albieri）ホテル」でヴァルダーニョから数キロメートルのキャステルヴェッキオ（Castelvecchio）にある。もっぱら事務職・管理職とその家族向けで各室は浴室つきの客室、エレベータがあり、大きな公園も併設されていた。

都市周辺の附属果樹園には食材供給拠点として模範農場「お気に入り（Favorita）」をつくり、市内には「Magazzino della Lana」百貨店と「消費者組合」の倉庫を作った。「お気に入り」からは新鮮な牛乳、野菜、果物が供給され、「消費者組合」の倉庫にはパン、小麦粉、脂肪（ラード）、肉が常備され、５軒の大きな食料品店で労働者にあらゆる商品を安価に提供していた。

ルイジ・マルゾットはまた、芸術を愛し、今日で言う「企業メセナ」活動にも熱心であった。1836年、優れた画家の作品を顕彰する「ルイジ・マルゾット芸術賞」を創設し、1951～1964年の間はイタリア国内、1953年からは全欧州を対象としてコンペを主催していた。そして当時の新進気鋭の作家アルベルト・ブーリやルチオ・フォンタナなどによる、ニューレアリズム、マテリアリスムス、コンポジションといったモダン・アートの魁となる新領域の作品の発掘に貢献した。

工場本館の事務所棟２階廊下には今もこれらの作品が展示されており、工場内に「アート・ギャラリー」が常設されている様子は壮観である。

Ⅳ．まとめと考察

（1）産業遺産と文化政策

イタリアは、世界的に見ても様々な意味で「文化大国」である。すなわち、人類全体の屋台骨となるような重要な歴史的要素のぶ厚い蓄積が今日まで連綿と続いているのである。そのぶ厚い蓄積の上に立って、特に近年では生活の「衣・食・住」に関わる部分、ファッションやアート・工芸におけるデザインの領域、そしてそれらのイタリアらしい個性を持った地域資源を生かした観光の分野などでの優越性が特徴である。

今回の北イタリアにおける地域の産業遺産の活用による新しい地域政策の展開調査から、産業遺産の保全や修復という一見地味な活動が、服飾デザインや芸術振興、観光、グルメといった今日的な新しいイタリアの魅力の向上と密接に連携していることが明らかになった。すなわち、地域政策は「文化大国」イタリアが、さらにその地位を強固なものとするための文化政策の一つであるとみなすことができよう。

第２章の「羊毛街道」と拡大EU版の「鉄の道（アイアン・ルート）」は、ともに中世以来の地場産業から発展した地域の特色ある産業集積を基盤としている。そして同時に、新しい服飾デザインのためのアーカイヴの充実、新しい芸術家の活躍の場の提供（公的な博物館機能と企業のメセナ活動）、関連する地域独自の文化の情報発信を通じて、「デザイン」と「観光」といった今日のイタリアの国際的競争力の一層の伸長にも資するような基本方針が貫かれている。

また、両者は、拡大EU時代の特色である「国家の枠組みではなく、もっと小さな地域の枠組みでの個性の発揮と発展」という構造を具現化するように、アルプス周辺の国家の枠組みを超えた地域特性の類似性による連携のネットワークを作りつつある。一つひとつは小規模で魅力の乏しい地域資源であっても、地場の歴史に裏付けられたネットワークとして連携することで、地域全体として人々をひきつける魅力を発揮するという方向は、本研究の（その１）から（その３）で共通して見られる戦略のひとつである。

第３章の「工場都市」あるいは「産業村」は、イタリアに限らず、ともに産業革命を経験した欧州諸国が共通して持つ一つの社会思想が具現化された例であり、拡大EU域内の各地に展開しているものである。そこには都市の福祉政策、都市経営、労働者福祉、消費者運動、生涯学習に加え、都市の文化振興などの非常に今日的な都市の課題解決のための都市政策の萌芽が共通して見られる。かつての「工場都市」や「産業村」を産業遺産として保全、整備することは、そのまま今日の都市政策や都市の文化政策の流れを具体的になぞることでもあり、欧州諸国が平行して歩んできた「近代化」のプロセスの生き証人となって今日の都市政策・地域政策の再構築のための足がかりとなるものである。

イタリアにおける本論の2つの例は、イタリアならではの毛織物工業や建築デザイン、そして労働運動の思想において特色を有するものであり、イタリアにおける「工場都市」「産業村」の保全、活用は、特に文化面でのイタリアの独自性の再発見と再構築による強化につながることが期待されている。

そして、本研究（その１）から（その３）の全体を通してみられるように、これらの活動が、国家だけではなく、拡大したEU,州、県、地域、広域自治体、市町村の公的セクター、市民活動団体や各種NPOやCBO（Community Based Organizations）といった市民セクター、大学、研究所、博物館のネットワークといったアカデミック・セクター、そして地域の有力企業や地域貢献、文化活動に熱心な企業セクターによる「協働」のもとで支えられていることが大きな特徴である。裏返せば、この「協働」に失敗した事例はことごとくこの舞台から退場せざるを得なかったということが明らかになった。

（3）文化的景観と環境問題

本稿で取り上げた事例は、地域の歴史遺産（＝観光資源）を活かし地域を再活性化しようとする「地域主体／主導の取り組み」である。地球温暖化による気候変動が懸念されている今日、本稿で論じた歴史遺産（＝産業遺産）を取り囲んでいるのは遺産に関連する「文化的景観」と“手つかずの(公式サイトにはuntouched, genuine等の用語が散見された)”自然(景観)なのである。

世界はいま、産業振興の政策的見直しの時期に来ている。自然の中の文化的景観を活用し、出来るだけ周りの自然を傷めない開発・発展をめざすことが求められている。“持続可能な開発・発展(sustainable development)”は、「1986年の「環境と開発に関する世界委員会（通称ブルントラント委員会という）」で提起されて以後、開発戦略の中心軸に据えられていく」[13]のである。主に発展途上国の、経済と観光の開発・発展のための政策・戦略であったものが、京都議定書／90年代半ば以降、先進国内でもそして拡大EUにおいても政策・戦略として選択されるに至っている。地域政策を検討するとき、この視点を外すわけにはいかないのである。

Ⅴ．補論：産業遺産を活用した地域振興と拡大EUの法的枠組み

はじめに

今回の共同研究は、主にイタリアの文化遺産を扱っている。本稿では、イタリアを含むヨーロッパの文化遺産の保護政策の法制度的枠組みを概観しておきたい。具体的には、EU（欧州連合）と欧州審議会（Council of Europe）、UNESCO（国際連合教育科学文化機関）の文化政策について順に述べていく。それぞれの主体が行っている施策の主なものにも言及する。

1．EUの文化政策

（1）EUの概要

1957年、旧西ドイツ・フランス・イタリア・オランダ・ベルギー・ルクセンブルグがローマ条約を締結して、翌58年にEEC（European Economic Community欧州経済共同体）が成立した。67年に、EECとECSC（欧州石炭鉄鉱共同体）およびEURATOM（欧州原子力共同体）が合体して、EC（European Communities欧州共同体）が成立した。1973年にイギリス・デンマークが加盟、また86年にポルトガル・アイルランド・ギリシャ・スペインも加盟し、拡大ECが成立した。1992年には、単一通貨、共通外交・共通市民権などのプログラムを定めた欧州連合条約（マーストリヒト条約）が調印され、93年に発効してEU（European Union欧州連合）が成立した。この後、95年に3カ国、2004年に10カ国が加盟し、EU加盟国は25カ国となった。

（2）教育・文化に関する条約の規定

1993年発効のマーストリヒト条約126条・128条（1997年に欧州理事会で合意されたアムステルダム条約においては149条・151条）は、EUの文化・教育に関する施策について、次のように規定している（条約の訳文は、後掲の参考文献①・④に依拠した）。

［第149条：教育］

1. 欧州共同体は、加盟各国における教育内容及び教育制度の組織並びに文化及び言語の多様性についての各国の責務を十分尊重しつつ、各加盟国間の協力を促進し、必要であればそれらの行動を支持し、補うことにより、質の高い教育の発展に貢献する。
2. 欧州共同体の措置は以下のことを目的とする。
   - 教育における欧州共通の次元（European Dimension）を築く。そのために加盟各国の言語の教育と普及に特に力を入れる。
   - 学生と教員の移動を促進する。とりわけ、教育修了資格及び修学年限の相互認定を奨励する。
   - 教育機関の間の協力を促進する。
   - 加盟国の教育制度に共通する問題について、情報や経験の交換を進める。
   - 青少年の交流及び社会教育指導員の交流を促進する。
   - 通信教育の発展を促す。
3. 欧州共同体及び加盟各国は、第三国及び教育分野において権限のある国際機関、とりわけ欧州審議会との協力を促進する。（以下略）

［第151条：文化］

1. 欧州共同体は、構成国の国内的及び地域的多様性を尊重すると同時に、共通の文化遺産を前面に出しながら、加盟各国の文化の繁栄のために寄与する。
2. 欧州共同体による措置は、構成国間の協力を助成しかつ必要に応じて以下の分野においてそれらの活動を支持し補完することを目的とする。
   - 欧州諸国民の文化及び歴史についての理解及び普及の改善
   - 欧州的重要性を有する文化的遺産の保存及び保護
   - 非商業的な文化交流
   - 視聴覚分野を含む文化的創造
3. 欧州共同体及び加盟各国は、第三国及び文化分野において権限のある国際機関、とりわけ欧州審議会との協力を促進する。
4. 欧州共同体は、この条約の他の規定に基づく措置を執るに際して、文化的局面を、特に文化の多様性を尊重し、促進するために考慮する。（以下略）

このように、教育・文化に関わる施策についての権限は基本的に各構成国にある。EUの活動は、各構成国の地域的多様性を尊重しながら、これを支援・補完するものと位置づけられている。

2004年に締結されたEU憲法条約（2005年オランダ・フランスにおける批准が否決されたため、未発効）においても、「教育・職業訓練・若年層・スポーツ、文化」などに関しては、EUの権限は、支援・調整・補完的権限であるとされている（Article1-17)(参考文献⑧ pp.225-227参照)。

（3）EUの国際交流政策

欧州における教育・文化の領域の国際交流事業は、①各

加盟国政府、②EUの教育・文化総局（第10総局）、③欧州審議会（Council of Europe）によって担われている

このうち①については本稿では扱わず、②について以下概略を見ていく。③については、項目を改めて３で扱う。

① EUの教育・文化総局

1999年以前は、情報・コミュニケーション・文化・視聴覚メディアなどを扱う第10総局と、教育・職業訓練・青少年問題を扱う第22総局に担当が分かれていたが、1999年９月にロマーノ・ブローディを委員長とする欧州委員会が発足して、ヴィヴィアン・レディングViviiane Reding（ルクセンブルグ出身）がこの領域の担当委員（Commissioner）に就任した時点から、第10総局が両方の分野を統合する形となり、教育・青少年問題・文化・スポーツ・市民権・視聴覚・言語がその対象分野とされている。

芸術・文化・文化遺産といった狭い意味での文化領域をはじめとして、留学生の交流、言語プログラムの支援など、国際交流の政策の実施は、この第10総局がほぼすべてを行っている。なお、2004年にヴィヴィアン・レディングは、情報社会・メディア総局Information Society and Media DGへと担当を移った。

② EUの教育・文化面における国際交流政策

（a）域内交流の概要

マーストリヒト条約において規定された「文化条項」に基づき、EUは域内の国際交流を後押ししている。政策の柱は、ひとつがヨーロッパの共通性の認識・育成に寄与すること、そしてもうひとつが、加盟国間の文化的・人的交流の促進である。

中でも教育交流分野を中心とする人的交流に力点がおかれている。つぎのような名称のプログラムが、第10総局によって進められた（これらのプログラムについては、参考文献③が詳しい）。

・ソクラテス（Socrates）
・レオナルド・ダ・ヴィンチ（Leonardo da Vinci）
・青年の欧州（Jeunesse）
・テンプス（Tempus）
・カルチャー2000（Culture 2000）
・メディア・プラス（MEDIA Plus）

（b）カルチャー2000

上記（a）のプログラムのうちカルチャー2000は、教育・文化総局の行う総合文化プログラムである。2000-2004年の間に、１億6700万ユーロ（約187億400万円）の予算があてられた（カルチャー2000については、参考文献①p.441および参考文献⑤pp.196-201参照。また、参考文献⑨は主としてこのテーマを扱っている）。

カルチャー2000の目的は次の６点である。

・文化や歴史についての相互対話や相互認識
・国境を越えた文化の普及と作品のみならず、文化創造に関わる主体の交流
・創作や新しいかたちの文化的表現の活用
・欧州共通の重要な遺産の欧州レベルでの活用
・社会的・経済的発展における文化の役割の考慮
・経済的発展、社会的統合や市民権意識の普及に寄与するものとしての文化間の対話の促進と文化の再認識

カルチャー2000は、当初５年間という期限のついたプログラムであったが、２年間延長された。

（c）欧州文化首都

上記（b）で見たカルチャー2000の中の注目すべき事業として、「欧州文化首都（European Capital of Culture）」がある。

この事業は、各加盟国の独自の文化や歴史への理解と尊重や、域内の文化のネットワーク構築を目指して、1985年に始まったプロジェクトである。年間を通じて、全ヨーロッパ規模の芸術行事が行われる。

開始から15年目にあたる2000年は、カルチャー2000の枠組みの中で支援を受けることとなった。同時に、区切りの年を記念して、この年は特別に次の９都市で開催されることとなった。アヴィニヨン（フランス）、ベルゲン（ノルウェー）、ボローニャ（イタリア）、ブリュッセル（ベルギー）、ヘルシンキ（フィンランド）、クラクフ（ポーランド）、プラハ（チェコ）、レイキャヴィック（アイスランド）、サンティアゴ・デ・コンポステラ（スペイン）。

以降、2001年にはロッテルダム（オランダ）とポルト（ポルトガル）、2002年にはブルージュ（ベルギー）とサラマンカ（スペイン）で開催された。以降の開催地は、2003年グラーツ（オーストリア）、2004年リール（フランス）とジェノヴァ（イタリア）、2005年には、コーク（アイルランド）。2006年バトラス（ギリシャ）、2007年シビウ（ルーマニア）とルクセンブルグで開催された。さらに2008年にはリヴァプール（イギリス）が予定されている。

（4）EUと地域との関係

1986年の単一議定書による改正で、「経済的社会的格差是正」の諸規定が設けられ、地域政策の農業、労働者養成、地域開発の各資金が「構造基金Structural Funds」（構造基金全般については、参考文献⑦が詳しい。）に一括され、EC次元の資金として運用されるようになり、地域・地方自治体は、ECの補助金の分配を、国家の政府を媒介せずに、直接に受けられるようになった。さらに92年のEC条約改正によって、欧州委員会の諮問機関であった「地域・地方団体協議会」は、EC閣僚理事会の補助機関に昇格し、「地方評議会」として制度化された。ECの働きかける相手として、単位が国家より小さい自治体の越境連合体といった主体もありうることになった（参考文献⑧p.223参照）。

EUの文化政策の領域において、EUと地域・地方自治体との直接的な関係が広く形成されることになっていくのかどうか、今後の動きが注目される。

３．欧州審議会（Council of Europe）の文化政策

1949年にチャーチルらの提唱により設立された欧州審議会（Council of Europe）は、第二次大戦後の欧州統合に向けた最初の試みであった。政治・経済・軍事にかか

わる領域からは離れて、人権擁護・民主主義の普遍化、文化の保護・発展への関与などを中心にして、欧州の基本的価値の番人としての役割を果たしてきた。EU加盟国はいずれも、加盟以前にすでに欧州審議会のメンバーでもある。欧州審議会はEUとは別の組織であるが、両者の関係は深く、その背後にある思想は近いと考えられる（参考文献① p.437 および参考文献③ pp.281-282 参照）。

アムステルダム条約151条に、「欧州共同体及び構成国は、第三国及び文化分野において権限のある国際機関、とりわけ欧州審議会との協力を促進する」と規定され、そして実際に、両者の間には密接な連携関係が築かれている（参考文献① p.449 参照）。

欧州審議会は、1993年の「ウィーン宣言」において、「文化面での協力は、教育、メディア、文化活動、文化遺産の保護と発揚、若者の参加を通じて促進されるが、そのために欧州審議会は最良の手段となる。文化協力は、凝集力と同時に多様性を有する欧州を確立するための基礎となる」と述べ、多様性の承認を基礎にしながら、欧州としての一体性の強化を目指している。

4．UNESCO（国際連合教育科学文化機関）の文化政策

UNESCO（国際連合教育科学文化機関）は、国際機関として世界の文化政策に関して重要な役割を果たしてきた（参考文献⑥ pp.218-223 参照）。EU の領域内においても、その果たしてきた役割は大きい。

UNESCO の活動のひとつに、世界遺産の指定がある。世界遺産の指定の法的基礎は、「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（Convention Concerning the Protection of the World Culture and Natural Heritage）である。この国際条約は、世界中の顕著で普遍的な価値のある文化遺産・自然遺産を人類共通の宝として守り次世代に伝えて行くことの大切さを唱えている。1972 年の UNESCO 総会で採択され、2006 年 10 月現在で、締結国は 184 に及ぶ。この条約により、世界遺産リストの作成や遺産の保護・支援を行う世界遺産委員会（World Heritage Committee）の設置が定められている（UNESCOの文化財保存事業については、参考文献②が詳しい）。

種類別世界遺産リスト登録件数は、2007 年 7 月現在で文化遺産660、自然遺産166、複合遺産25（合計851）となっている。

ちなみに、日本は1992年に125番目の締結国となった。2007年に石見銀山が世界遺産に指定され、観光ブームが起こっている。産業遺産の活用による地域活性化のよい事例を提供している。

おわりに

欧州の文化政策・文化遺産に関する政策主体は、各国家のほかにEUなどが加わって、重層的構造にある。それぞれの政策主体の法的基礎と活動ぶりについては、概略を把握することができた。しかし、各主体間の相互関係、また投じられている資金の種類や額などに関しては、ここでは十分詳しく分析することはできなかった。これらについては、今後の課題としたい。

＜参考文献＞

① 国際交流基金『主要先進諸国における国際交流機関調査報告書』（2003）所収の「Ⅷ参考調査１：地域統合と国際交流－ EU を事例に」（正躰朝香）
② 同上書所収の「Ⅸ参考調査2：国際交流における文化協力－UNESCO 文化財保存事業を事例に」（牧田東一）
③ 坂井一成編著『ヨーロッパ統合の国際関係論』（芦書房　2003）所収の「第８章 EU の教育・文化交流政策－ EU の「アイデンティティ」と「ソフトパワー」」（川村陶子）
④ 同上書所収の「第９章「多様性の中の統合」を目指すEU」（正躰朝香）
⑤ 田中俊郎・庄司克宏編著『EU 統合の軌跡とベクトル』（慶應義塾大学出版会　2006）所収の「第８章 EU の文化政策－ EU における「文化」言説と政策」（譲原瑞枝）
⑥ デイビット・スロスビー 著；中谷武雄／後藤和子 訳『文化経済学入門』（日本経済新聞社　2002）
⑦ 辻悟一『ＥＵの地域政策』（世界思想社　2003）
⑧ 中村民雄 編『EU 研究の新地平』（ミネルヴァ書房　2005）
⑨ Hella Gerth「EU Cultural Policy and Transnational Networks」http://www.jhubc.it/ecpristanbul/virtualpaperroom/016.pdf#search='EU%20Cultural%20Policy% 20Gerth'（2006）（2007 年９月検索）

【注】

1） 根本、種田、藤田「拡大EU時代の欧州地域政策の比較研究（その1）」『静岡文化芸術大学研究紀要』第６巻、静岡文化芸術大学、2006 年に収録。関連研究報告を『都市・地域研究』003 号、静岡文化芸術大学根本研究室、2006 年に収録。

2） 根本、種田、藤田「拡大EU時代の欧州地域政策の比較研究（その2）」『静岡文化芸術大学研究紀要』第７巻、静岡文化芸術大学、2007 年に収録。関連研究報告を『都市・地域研究　008 号、静岡文化芸術大学根本研究室、2007 年に収録。

3) 北イタリアは、イタリアを北部、中部、南部の３分割、あるいは北部、南部の２分割としたときに用いられるが、3分割で用いられることが多く、ここではそれを採用する。厳密に「北イタリア」に含まれる州が決まっているわけではなく、イタリア国内で最もよく用いられる区分ではエミリア＝ロマーニャ州以北となっている。西から、ピエモンテ州、ヴァッレ・ダオスタ州、リグーリア州、ロンバルディア州、エミリア＝ロマーニャ州、ヴェネト州、トレンティーノ＝アルト・アディジェ州、フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア州が含まれる。

4） TICCIH（国際産業遺産保存委員会）：TICCIHは、1978年スウェーデンで開催された第３回国際産業記念物保存会議(TICCIM = The Third International Conference on the Conservation of Industrial Monuments)が、発展的解消／改称して設立された国際会議組織（NGO）である。TICCIMがTICCIH(＝The International Committee of Conservation of Industrial Heritage)となり、２～３年ごとに開催され、本会議も同じ略称TICCIH(テッキー＝The International Conference for the Conservation of the Industrial Heritage)とし、TICCIMを第３回TICCIHとして現在に至っている。

第１回（FICCIM）は 1973 年アイアンブリッジで開かれ、ニール・コソンズ卿（参考資料６）(Sir Neil Cossons：アイアンブリッジ峡谷博物館；サイエンス・ミュージアム；マリタイム・ミュージアムなど主要博物館館長を歴任し、現在 English Heritage 理事)を中心にＲ・Ａ・ブキャナン(R・A・Buchanan：バース大学技術史研究センター長；当時・以下同じ)、Ｂ・トリンダー（参考資料７）(Barrie Trinder：サロップ州議会成人教育オーガナイザー)、Ｒ・Ｍ・フォーゲル(Robert M. Vogel：スミソニアン・インスティテュート土木部門キュレーター)、Ｊ・Ｒ・ハリス(John R. Harris：バーミンガム大学教授・社会経済史)、マリー・ニッサー(Marie Nisser：ウプサラ大学教授・科学技術史)など、当時気鋭の産業遺産研究者を招集し発足したのであった。（本節について、詳しくは種田明「産業遺産研究・産業考古学の国際的な展開と課題――国際産業遺産保存会議（TICCIH）の沿革と日本――」：『経済経営論集』(桃山学院大学)第 39 巻第２号（1997 年 12 月）、pp. 49～61 を参照。

第２回（SICCIM）は 1975 年ボッフムで開かれ、ルール地域(本研究の第１回調査2004)の産官学民に大きなインパクトを与え、結

果としてのちの“エムシャーパーク・プロジェクト”(博覧会1988～1997)や「ツェヒ・ツォルフェライン(関税同盟坑)石炭鉄鋼産業複合体／エッセン市」の世界遺産登録を先導する役割を果たしたのである。すなわち、TICCIHは第３回本会議において早くもNGOとして世界各国へ参加を呼びかけ、EUやUNESCOへ働きかけを開始しているのであった。TICCIHの開催を、本会議開催都市のみならず開催地域(広域)は、当該地域の(産業観光)振興と開催国自身の産官学民(文化政策施行の)連携やネットワーク強化の好機と捉え、開催国(とくに文化省)の全面的支援を受けていた、という実績を見てきた筆者(種田)の後知恵で言えることであるが。本会議の開催地／国、メインテーマ(種田仮訳)の一覧（下表）から、産業遺産の研究と利活用の国際動向が瞥見できよう。

TICCIHは、2000年(ミレニアム)本会議において、英国（UK）を本拠とする国際NGOとして正式にICOMOS(国際遺産遺跡委員会：世界遺産登録を審議するUNESCO関連機関)と提携し、2003年本会議においては産業遺産の調査研究・保存と(再)利活用に関する「ニジニー・タジール憲章」を採択し、ICOMOSの認証を経て、現在は世界遺産の中の“産業遺産”評価機関としても活動している。

5） ピエモンテ：直訳すると「山の足元」という意味。アルプスとアペニン山脈の麓、イタリア北西部の州。名前の発祥は12世紀にさかのぼる。ピエモンテ・アルプスのモンテ・ローザが有名。地域独自の豊かな食材に恵まれ、「スローフード運動」発祥の地のブラがある。

6） ビエッラ県：ピエモンテ州内の県で県都はビエッラ市。西南にトリノ県、西北をヴァッレ・ダオスタ州と接する。歴史上最初に登場するのは826年、神聖ローマ帝国皇帝ルートヴィッヒ一世が「ビエッラの自治都市」を帝国大使ボゾーネ伯爵に与えるという書簡である。882年にはカルロ３世がヴェルチェッリのローマ教会にビエッラを与える。10世紀には外敵の侵入に備えて城壁が、11世紀には教皇派と皇帝派の紛争に備えて城砦都市が創られる。ヴィスコンティ家との長い衝突の末、17世紀にはサヴォイア家のカルロ・アマヌエレ1世が、サヴォイア家支配の12県のうちの一つとして県庁所在地に指定。18世紀にはフランスに占領され、19世紀にはノヴァーラ県に組み込まれた後、第二次イタリア解放戦争でオーストリア軍に占領される。1927年に隣のヴェルチェッリ県に組み込まれ、1996年に再び分離。第二次大戦中ビエッラの丘陵地帯はドイツ占領軍に対するパルチザンの激しい抵抗の舞台となる。ミネラル水、ワイン、チーズに代表される豊かな食文化を持つ。

7） ビエッラの山岳地帯には、マルガリ、あるいはピエモンテ方言では「マルゲ」と呼ばれる山岳地帯に暮す人びとが住んでいる。彼らは今日でも極めて伝統的な生活スタイルを維持し、酪農を営み、トウモロコシのポレンタとともに自家製のバター、チーズ、肉などほとんど自給自足する地産地消のくらし方をしている。

8） シトー（Citeaux）会：後にベネディクト会修道院の修道会則に従う修道会のひとつ。シトー会は、1098年、フランスのシトーでベネディクト会のロベール（Robert de Molesme：1029?-1111）によって設立された修道会である。

9） 参考資料　3）より。

10） 橋本和也・佐藤幸男編『観光開発と文化』世界思想社、2003、p.27（第１章 観光開発と文化をめぐる政治経済学）参照。

11） 参考資料８）を参照。

12） グラマー・スクール：一般公教育の中等学校に対して、古典語、現代語、自然科学など中心の一般的教育を行う大学進学準備の公立中等学校。

13） 参考資料14）より。

参考資料

1） “la Strada della lana　Un percorso attraverso il patrimonio industriale beillese e valsesiano ” Docbi

2） “la Fabbrica della Ruota ” Docbi

3） 森田　優己「産業遺産と都市再生―イタリア中・北部TICCIHスタディツアー見聞録―」『桜花学園大学人文学部　研究紀要』第９号、2007年

4） ヴァルダーニョ市都市・地域計画局（Direzione Planificazione e Gestione del Trritorio） “Patrimonio Industriale e CittaSociale ”, 2006

5） Museo delle machine tessili “Valagno: Historical Centre and Social Town ”

6） Neil Cossons, *The BP Book of Industrial Archaeology*, London (David & Charles Newton Abbot) 1975/2000[4] ； 産業考古学・産業遺産研究の基本文献の一である。

7） Barrie Trinder(ed.), *The Blackwell Encyclopedia of Industrial Archaeology*, Oxford (UK) & Cambridge/Mass.(USA) (Blackwell) 1992

8） 鳥海基樹「イタリアに於ける産業遺産の保全と活用」(『イタリアの文化財保護制度の現在』独立行政法人文化財研究所ほか編、２００６、p.108～123所収)

9） Associazione Culturale NEMA (http://www.crespidadda.it/cgi-bin/WebObjects/ : A jewel of the UNESCO　Heritage, 2007.08.)

10） Answers.com (http://www.answers.com/topic/crespi-d-adda ; 2007.06.29.)

11） 世界遺産サイト(http://www.worldheritagesite.org/sites/crespidadda.html ; 2007.06.29.)

表 TICCIH 本会議の一覧　　**2007年８月現在：文責・種田**

回	開催年	開催地／国	メインテーマ
1	1973	アイアンブリッジ／UK	記録システムとテクニック；保存政策
2	1975	ボッフム／西ドイツ(当時)	産業考古学、産業記念物
3	1978	ストックホルム・グランゲルデ／スウェーデン	誰が産業考古学を担うか？(ケネス・ハドソン)
4	1981	リヨン・グルノーブル／フランス	産業考古学の価値
5	1984	ボストン・ローウェル／USA	産業遺産：私たちの直接の過去への最も近い道(マリー・ニッサー)
6	1987	ウィーン・フォルデルンベルク／オーストリア	ツーリズム、受容可能な再利用と産業遺産―如何なる政策が―
7	1990	ブリュッセル／ベルギー	産業、人間そして景観
8	1992	マドリッド／スペイン	保存・修復の基準、前時代技術による構造物の実行可能な活用法
9	1994	モントリオール・オタワ／カナダ	脱工業化(Deindustrialization)、20世紀最後の10年の特徴的現象
10	1997	アテネ・テッサロニキ／ギリシア	海事(海運の)技術
11	2000	ロンドン・コーンウォール／UK	産業革命は産業考古学へ；コーニッシュ鉱山伝説
12	2003	モスクワ・エカテリンブルグ・ニジニータジール／ロシア	旧産業センターの変貌と産業遺産の役割
13	2006	ローマ・テルニ／イタリア	産業遺産と都市の変容；生産的(諸)地域と産業景観

12）"From the Ladies of the Bridge to the Pria Mill" Della Signore del Porte al Lanificio Pria
13）Alessandra Marin "UN TERRITORIO E UNA CITTA PER L INDUSTRIA: la Valdagno di Gaetano Marzotto"
14）橋本和也・佐藤幸男編『観光開発と文化』世界思想社、2003